



世界との闘争

—詩について—

ヤマダヒフミ

「新選田村隆一詩集」をパラパラと読んでいたら、僕が昔挟んだ田村隆一の詩「誤解」のプリントがパラリと出てきた。その詩は以下のようなものだ。

「秋から冬へ

人の影も物の影も長くなる

どこまでも長くなって

人と物は小さくなる

人については

ぼくも少しは知っている

政治的な肉体にエロスの心が閉じ込められている存在

若いときは誤解したものだ

エロスは肉体に宿り心は政治に走ると

そして今も誤解しているのかもしれない

人の影と物の影が重なり合って

暗くなっていく世界を」

僕はこの詩が好きだ。そして、この詩を自分で打ち込んで、プリントアウトしてこの詩集(詩集にこの詩は載っていない。それで。)に挟んだ、何年か前の僕の気持ちもよくわかる。そしてこの詩を眺める今の僕は当時の僕と、それほど異なった位置にいる訳ではない。

*

吉本隆明は日本のプロ詩人として、吉増剛造、谷川俊太郎、田村隆一の三人を上げた。僕はこの三人にまど・みちおを加えても良いと思う。彼らの詩の特徴は吉本の語った通り、言葉が生命に染み込んでいる度合いだ。当たり前の事だが、詩人の詩というものには、どうあがいてもその詩人の血肉が染み込んでいなければならない。そしてそれをできているのは、おそらく最近では上記の四人なのだろう。・・・我々の周りにある詩の殆どには、詩人の個性は見られない。それは個性以前の段階で留まってしまうのである。良い詩人の詩は、いや、良い表現者の表現というのは、それが良い作品であろうと悪い作品であろうと、その作者の血肉が染み込んでいる、魂の分離がなされて、その詩にももう一人の分裂した作者が棲んでいるという点にある。

僕は上記の詩人はいずれも好きなのだが、一番好きなのはやはり田村隆一である。田村隆一には強い倫理性と共に、文学の正統性とでもいうべきものがある。そこには善と悪の問題があり、悪を強く憎む、という人として当然の価値観が存在する。だが、今、何が悪か?と問う事は難しい。

それに比べると、谷川俊太郎というのは一種フリーダムである。田村のように、強い一本道をねばり強く歩いているという印象はない。その代わり、谷川俊太郎は風呂敷のように様々なものを覆う事ができる。それは自由自在で、様々な適正を持つ。だが、自由故の放埒、という危うい立場も谷川は常にその背後に抱えており、彼は詩人として、常にその危機を見ざるを得ない。だからこそ谷川は以下のように答えるのである。「・・・書くために／書かないでいることを学び・・・」

吉増剛造は袋小路そのものである。彼は現代詩の極北であり、浅はかな危機感を持っている自称現代詩人達を彼はその詩で笑っているのである。現代詩・・・近代詩の延長としての、という考えに留まっている限り、問題は吉増剛造の窮屈さと華やかさに還元されるように思える。

まど・みちおに関してはあまり読んでいないので、割愛する。

さて、僕は田村隆一の詩をきっかけにして、何を語りたかったのだろうか?・・・おそらく詩というものに触れたかったのだ。・・・だが、研究者達の考えるように詩というものは確固としてあるものではない。二十世紀最大の詩人といってもいいオーデンの詩を読めば、そこに見えてくるのは詩という本体ではなく、悪に怒り、恋人を愛し、安酒場で世界を憂えている一人の詩人の姿である。このバカ者——天才は、詩という道具を使って世界に触れ、世界に語りかけるのである。

詩は道具である。目的ではない。他人に対する強い感情、世界に対する愛、それ故の失望――そんなものを感じ取れない人間が一流の詩人となる日は決してこないであろう。だが、それでも世間や社会は形式としての詩を追い求め続け、そして偉大な詩も偉大な詩人もみんな博物館に閉じ込めておこうとするだろう。

我々は詩を書く前に、この博物館を出なければならないのだ。そして言葉という剣によって世界と闘い――あるいは和解しなければならないのだ。